

《企画書》

提出者 宮内健輔

【タイトル】 夢の森で出会うとき

【概要】

本企画は、心理カウンセリングを通じて無意識の世界で人生における「絆」の力を描いたフィクション企画です。主人公の心理カウンセラーを軸に4人の世代や立場、性別の異なるクライアントがそれぞれカウンセラーのもとで「夢」を語り、心の深層に触れることで変わり始めるストーリーを仕立てます。物語の軸となるのは、ユングの「集合無意識」とフロイトの「夢分析」という心理学の理論です。無意識の世界に眠る「夢の象徴」を通じて、人生を変えるきっかけを掴み、人との偶然かもしれない絆の大切さを訴えていきます。理論と物語を通して、現代社会で生きている読者様の人との繋がりや、絆を通して生きていく希望を訴えます。人との関係性が希薄に感じがちで、20代～40代の方への心のデトックスになり、人との繋がりを広げる希望を伝えられることをテーマに考えております。

【想定する読者ターゲット】

20～40代男女

仕事や恋愛や経営に悩む成人

心理学に興味を持つ初心者

感動的なストーリーを求める読書好き

【構成案】

序章：無意識と夢の世界へようこそ

カウンセラーが病床で振り返る、ユングとフロイトの理論を軸にした人生。「集合無意識」と「夢分析」に触れてクライアントとの話を回想し始める。

第1章：自己否定からの脱皮

営業職の失敗に苦しむ新入社員の理沙が、蛇の夢を通じて変容を目指す。

カウンセラーとの対話が、自己肯定感を取り戻すきっかけに。

第2章：廃墟の中で光を見つける

恋愛依存と失恋に苦しむ美咲が、廃墟の夢を通じて自己愛を再構築。

武道の道場との出会いが、新しい希望をもたらす。

第3章：嵐の中で立ち尽くす

武道の道場を経営する雅人が、嵐の夢を通じて使命感を再確認。

理沙や美咲との繋がりが、道場の再生を後押しする。

第4章：永遠に続く階段を登る

家庭と仕事で孤立する大輔が、階段の夢を通じて自分の価値観を見直す。

息子が武道の道場に通うことで、人生に新たな意味が生まれる。

最終章：心の森 — 夢が紡いだ絆

4人がカウンセラーの葬儀で交わり、偶然的な夢と無意識の繋がりを実感。

カウンセラーの最後の夢が、4人の成長と絆を象徴する。

。

【サンプル原稿】

エピローグ：森の記憶

風が静かに木々を揺らす音がした。目を閉じると、それが遠い記憶の中で何度も聞いた音のように思えた。夕陽が斜めに差し込む薄暗い病室の中で、彼は静かに目を開けた。その瞳には、微かな光が宿っている。

彼の人生は、いつも「聴く」ことから始まった。人の声、沈黙、そしてその奥底に眠る言葉にできない感情。それらに耳を傾けることで、彼は数え切れないほどの心の森を旅してきた。

無意識とは何だろうか？

フロイトはそれを、意識の下に隠された抑圧された記憶や欲望と定義した。そしてユングはさらに深い場所に「集合無意識」があると考えた。それは、人類が共有する普遍的な記憶やイメージ。アーキタイプの世界。先人達はその存在を信じ、夢を通じて人々の無意識に触れてきた。

今、彼の心には一つの風景が浮かんでいる。大きな森の中にいるような感覚だ。そこには無数の木々が生い茂り、それぞれが違う形をしている。しかし、その根は深い地中で絡み合い、見えない場所で一つに繋がっているように感じられた。

彼がこれまでに聞いた夢の中には、森や木を象徴するものが多かった。木々は成長を、嵐は困難を、光は希望を象徴する。夢の中で語られるこれらの象徴は、彼が無意識の中に潜む声を聴き取るための大切な手がかりだった。

「無意識は、意識の影のようなものだ。」

その言葉を初めて学んだとき、彼は深く頷いた。影は意識の裏側に広がり、そこには抑圧された感情や、見過ごされた自分自身の一部が潜んでいる。そして、そこに触れることができたとき、人は自分が何者であるかを理解し、少しずつ変わることができる。

風景が変わる。彼は夢の中にいるような感覚を覚えた。目の前には一本の古い大木が立っている。その幹は太く、ひび割れた樹皮の間から新しい芽が顔を出していた。

彼はその木に手を触れる。樹皮のざらつきが手のひらに伝わり、そこから不思議な温もりが広がった。木の根元に目をやると、地面に無数の細い根が張り巡らされているのが見えた。

「これが、絆かもしれない。」

声には出さなかったが、その言葉が心の中に浮かんだ。木々が根を絡ませて大地と繋がっているように、人間もまた見えないところで繋がり、互いに影響を与え合っているのだろう。

その時、彼はふと気づいた。遠くから誰かが話している声が聞こえる。それは決して耳で聞く声ではなく、風に乗って心に響くような、不思議な音だった。

「これまで、よくやってきたね。」

声はどこからか湧き上がり、彼の中に優しく溶け込んだ。その言葉は、まるで彼自身の無意識が語りかけているようだった。彼は目を閉じ、息を整えた。

深い呼吸をするたびに、森の風が肌を撫で、胸の中で大地の鼓動が響くようだった。彼はどこかで感じていた。この旅路の終わりが近づいているのだと。

静かな夕暮れの光が病室を満たしていた。彼の表情は穏やかで、その瞳には一片の不安も見られない。森の中で見た木の温もりが、彼の手のひらにまだ残っているように感じられた。

「人は一人では生きられない。」

その言葉が、最後に彼の心に浮かんだ。そして、その想いと共に、彼はゆっくりと目を閉じた。

その瞬間、風が止まり、木々のざわめきが静寂の中に溶けていった。しかし、その森は消えることなく、彼の心の奥深くで、そして他の誰かの心の中で、根を伸ばし続けるのだろう。